

冬のアメリカに行ってきた。といっても去年の話になってしまった。LA近郊でリフレッシュして、ついでに新ネタを仕入れ、その後パームスプリングスから東に5時間飛行機を乗り継いでケンタッキー州ルイビルのパームシヨウで日本農業の将来を見ることになる。

ケンタッキー州は1861年の南北戦争のときは中立州だった。とはいえ、今でも他の州からは普通に南部の扱いをされるのは、当地に奴隷制度が存在していたからだ。人口の30%はアフリカン系なのにファームシヨウ会場を一日見て回ってざっくり5万人に会うが、アフリカン系には会うことはない。

日本の教育を受けていれば、普通の出来でも「リンカーンは奴隷解放をした」ということを覚えている。では解放された奴隷はその後どうなったのか？ アメリカの教育を受けた者でも円周率は3だと答えてしまうが、解放された奴隷のその後は簡単に答えることが出来る。その答えは先ほどの私が述べた会場の数と関連するのだ。

## アメリカ式 豆の未知ゾーン

すべての計算にはファクター（係数）が大切であるとアメリカ式算数

を学んだ後、次の目的地ノースダコタ州ファゴに向かった。30年来の知り合いのボブの家に泊まり、奥さんのロイスが作るアメリカ家庭料理チリビーンズでの出迎えが定番になっている。

日本人の多くはこのチリビーンズで使われるキドニービーン（金時豆の原種）とミートソースの煮込み料理が苦手な人が多い。私は初めて食べた21歳のころから「あく勝ち組の料理だ」と舌鼓を打ち快感に浸った。

同じ豆料理でもアメリカ人は「あんど」が苦手なようだ。同じ砂糖の量でもケーキよりも太らないことを日本人は知っているが、現地であるこの普及はまったく進んでいない。アメリカで寿司を普及させるよりも現地で収穫された「アズキビーン」のお菓子や料理を普及させることが地産地消の言葉が出来たアメリカの利益になると思うのだが、現実にはアメリカ人も日本人もお互いの「未知のゾーン」には興味を持たない。不思議なことだ。

## アメリカ式の学び方

Vol.105



宮井能雅

1958年3月、北海道長沼町生まれ。現在、同地で水田110haに麦50ha、大豆60haを作付けする。大学を1カ月で中退後、農業を継ぐ。子ども時代から米国の農業に憧れ、後年、オーストラリアや米国での農業体験を通して、その思いをさらに強めていく。機械施設のほとんどは、米国のジョンディア代理店から直接購入。また、遺伝子組み換え大豆の栽培を自ら明かしたことで、反対派の批判の対象になっている。

## アメリカ式 土産の選び方

30年来の取引先に行くときは前日にお土産を用意する。9・11前の検疫が緩かったときには、あんどがたっぷりのお焼きを持参したが、これは先ほどの理由で評判がエラク悪かったのだ、最近では血糖値向上に寄与できるドーナッツを用意する。

外気温マイナス30℃から

オレにも  
言わせる!

北海道長沼発  
ヒール・ミヤイの憎まれ口通信

取引先の会社の自動ドアが開くとまず秘書のサラ、ジュリー、ルアンが「ハーイ Masai」サンキュー・ドーナツ」の掛け声でパート担当のダンナーや従業員が同じく「サンキュー Masai」の大合唱になる。

なんで私がドーナツツ400ドル分を用意しなければならぬのか、自分でもよくわからないが、お土産代わりの潤滑剤と考えれば適正なコスパになるのだろう。

関係者と所用を済ませ、翌日は今まで私が紹介した北海道の生産者の息子さんたちが研修した大豆、コーン生産者にあいさつに行く。今までのジャパニーズ・ボーイの受け入れを感謝し今後の研修もお願した。

なんでも以前は英語が母国語の南アフリカ人をエージェントを通じて雇用していたが、二人やってきて最後まで何とかなるのは一人だそう。そこに私が紹介したジャパニーズ・ボーイがみんな勤勉で学習能力があるとの評価を受けるのだから神様扱いになる。

日本では農家数が減り大変だーと言う方がいるが、そんなハンカクサイことを言う小作人根性の持ち主のことはブン投げておけばいい。先を考えると農家の数ではなく、農家で雇用できるスキルを持ったワーカーの確保の方が直近の問題である。

## アメリカ式 民主主義の学び方

その後、研修生を受け入れてくれた金髪・ブルーアイたちと近くの町で食事をした。数年前にも訪れたレストランだが以前から気になったことがある。店内にいる客の視線をピンピン感じるのだ。

日本に帰ってある事実に度肝をぬかされた。15年前に同じ町のレストランで金髪・ブルーアイの現地女性と食事していた22歳のジャパニーズ・ボーイに、酔っ払いがテーブル・ナイフを持って背後から襲ってきた。殺気を感じたU君は左フックを相手のアゴに一発。店内はキャーとなり、お決まりのポリスが登場した。そのとき右腕に軽い痛みが……。どうも相手のナイフが腕に当たっていたらしく傷害事件になるだろうと思ったそうだ。

倒れた相手はバタンキュー状態だ。どうなるのか……先に襲ってきたのはあいつだし……喧嘩両成敗か、正当防衛が認められるのか、当然ムシヨ入りも覚悟したそうだ。

ポリスが周りの人から状況を聞き、U君に近づいたときには手錠を覚悟したが、意外な一言「相手が800ドル今払うのでそれで解決しないか」の取引に「イエス・オフィサ

ー!」の即答。U君は帰国も迫っていたし、かすり傷程度だったのでお金を受け取った。

後日談がある。その後U君が当地の銀行に行くことになり、カウンターに進むと、なんと彼を襲った本人が満面の笑顔で「よーこそいらっしやいませ」。つまり彼は留置所に泊まった程度で、起訴されず裁判にならなかったようです。U君は「アメリカ式民主主義を学ばせていただきました」だった。

事件後、食事をした現地の金髪・ブルーアイの州立大学女学生からは「日本人ってアッチだけではなく喧嘩も強いね♡♡ 私日本に付いて行くから!」となったそうだが、U君は耐えがたきを耐え、忍びがたきを忍んで一人北海道へと帰国の途に就いた。今は道東に住む35歳を過ぎたU君は独身だ。彼いわく「運はアメリカで使い果たした」。

## アメリカ式 「時そば」の食らわせ方

今回は初めてアメリカン航空を使った。アメリカ国内はマイルで買いたが、後からこの判断が尾を引いた。ミネアポリスからDFW(ダラス・フォートワース国際空港)までは定刻で到着し、国際線乗り継ぎのLAX

(ロサンゼルス国際空港)便に乗り込んだが、整備で30分、続いて1時間必要とアナウンスされた。LAXの乗り継ぎは2時間だ。あゝ、東京行きに間に合うかな。一応アメリカンの職員に相談すると彼はこう言ってきた。「LAXの乗り継ぎは2時間ですよ。DFWとLAXは時差が2時間ありますから、10分時間がありますので心配しないでください」。

私は頭が混乱した。もし2時間遅れで出発しても時差が2時間あるから東京行きに間に合う? おぼちゃんCAに相談するが、中指と人差し指をクロスしやがった。これって「グット・ラック」の意味だろ? ってことは……。最終的には2時間半くらい出発が遅れ、そのままLAXに着いた。

FOCK! さなばぢちこ! あすホール! やられた、ハメられた。どう考えても2時間の乗り継ぎは2時間である。出発地で2時間半遅れたら東京行きの飛行機は飛んで行ってしまふのは当たり前だ。

35回アメリカに来ていたが、こんな単純なことを理解していないとはなんとも情けない。それにしてもあのDFWのアメリカン職員の堂々とした態度はまさしくアメリカ流「時そば」だ。